

## 『源氏物語』 柏木の亡霊考

### 「陽成院の御笛」の意味するもの――

山 畑 幸 子

#### 一 はじめに

「陽成院の御笛」。この笛は、「横笛」巻で、一条御息所（落葉宮の母）から柏木の遺品として夕霧に贈られたものである。そして、その夜、夕霧の夢に「思ふ方異にはべりき」（「横笛」三六〇頁）<sup>（注1）</sup>と柏木の亡霊が現れる。笛を伝えたい相手は夕霧ではないというのである。夕霧は、この横笛の処遇の相談に光源氏のもとを訪れる。光源氏は、柏木遺愛の横笛について、「その笛はここに見るべきゆゑある物なり。かれは陽成院の御笛なり。」（「横笛」三六七頁～三六八頁）と、その由来を語るのである。

「陽成院の御笛」。これまで物語において登場することのなかった「陽成院」という固有名詞が、なぜここで語られるのか。即ち、柏木遺愛の笛がなぜ「陽成院の御笛」でなければならなかったのか。そして、この笛の伝授が、後の物語とどのような関わりをもつてくるのか。問題の所在は、大きくこの二点となるのではないだろうか。

亡霊となつてまで再登場する柏木の内面を追いながら、物語上の必要性という視点からこの問題を考えてみたい。

#### 二 柏木の心と物語展開

女三宮との事件を起こした直後の柏木には、光源氏に対する罪の意識は見られない。柏木は、泣いている女三宮に「のがれぬ御宿世の浅からざりけると思はしなせ」（「若葉下」二二六頁）と言ひ、また、「いとつき御心にうつし心もうせはべりぬ」（「若葉下」二二八頁）と、女三宮が柏木に心を開かないために自分は常軌を失ってしまったのだと語る。その後、次の傍線部の記述に見られるように、柏木は大殿（父の致仕大臣邸）に帰ってから、ここで初めて光源氏に対する罪の意識が芽生えてくるのである。

ア さてともいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしく恥づかしき心地して、歩きなどしたまはず。女の御ためはさらにもいはず、わが心地にも、いとあるまじ

きことといふ中にも、むくつけくおぼゆれば、思ひのままにもえ紛れ歩かず。帝の御妻をもとり過ちて、事の聞えあらむにかばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ。しかいちじるき罪には当らずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。

〔若菜下〕二二九頁―二三〇頁

そして、柏木が女三宮にあてた文を光源氏に発見されたことが分かる、柏木は次第に憔悴していくのである。

イ 空に目つきたるやうにおぼえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ。恥づかしく、かたじけなく、かたはらいたきに、朝夕涼みもなきころなれど、身も凍むる心地して、言はむ方なくおぼゆ。

〔若菜下〕二二五八頁

ウ 心地のいと悩ましくて、内裏にも参らず。さして、重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよと、かつはわが心もいとつらくおぼゆ。

〔若菜下〕二二五八頁

エ 衛門督を、かかる事のりもまじらはせざらむは、いとはえなくさうさうしかるべき中に、人、あやしとかたぶきぬべきことなれば、参りたまふべきよしありけるを、重くわづらふよし申して参らず。

〔若菜下〕二二三頁―二七四頁

オ 大殿に待ちうけきこえたまひて、よろずに騒ぎたまふ。さるは、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月ころ物などをさらにまゐらざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに

触れさせたまはず、ただ、やうやう物にひき入るるやうにぞ見えたまふ

〔若菜下〕二八三頁

カ 衛門督の君、かくのみ悩みたまふことなほおこたらで、年も返りぬ。

〔柏木〕二八九頁

このように、柏木が精神的に弱っていく様子が細かく描写されている。そして、その弱っている柏木にさらに追い打ちを掛けているのが、女三宮の出家である。女三宮の出家を聞いた直後の柏木の様子は、次のようである。

キ かの衛門督は、かかる御事を聞きたまふに、いとど消え入るやうにしたまひて、むげに頼む方少なうなりたまひにたり。

〔柏木〕三二〇頁

柏木は光源氏に対して罪の意識があり、そして、光源氏を恐れている。その為、光源氏に直接弁明するということもできず、夕霧を介して光源氏に思いを告げるといふ形となっている。さらに、柏木は、亡霊となつても、光源氏の夢に直接出現するということができないのである。柏木と夕霧との関係が、「早うより、いささか隔てたまふことなう睦びかはしたまふ御仲」〔柏木〕三二三頁と記されているように、光源氏と柏木との媒介に、夕霧が利用されているのである。

これまでは、光源氏と同世代の人物との間で展開される物語であった。作者は、世代の異なる光源氏と柏木とを、女三宮という接点で関連を持たせ、次に夕霧を六条院への接点として物語の展開に介在させているのである。

### 三 柏木の執着と亡霊

柏木は、病床の中、小侍従（密通を手引きした女房）に次のように胸の内を明かす。

ク 「今さらに、この御事よ、かけても聞こえじ。この世は、かう、はかなくて過ぎぬるを、長き世の絆にもこそと思ふなむいといとほしき。心苦しき御事を、たひらかにとだにいかにか聞きおいたてまつらむ。見し夢を、心ひとつに思ひあはせて、また語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな」など、とり集め思ひしみたまへるさまの深きを、かつはいとうたて恐ろしう思へど、あはれはた、え忍ばず、この人もいみじう泣く。

〔柏木〕 卷二九五頁～二九六頁

死期を予感しながらも、女三宮への思いとこれから誕生する我が子への思いが綴られている。その思いは、小侍従が「いとうたて恐ろしう思」うほどの強い執着であったことが分かるのである。

ケ 陸奥国紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、目の前にこの世をそむく君よりもよにわかるる魂ぞかなしき

また、端に、「めづらしく聞きはべる二葉のほども、うしろめたう思うたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生ひす

ゑ

〔橋姫〕 一五六頁

後に、「橋姫」巻で明らかになる柏木の手紙からも分かるように、柏木は生前に薫に会いたいと思っていたことが記されている。物語を通して、柏木の我が子薫への執着が一貫して描かれているのである。

柏木の死後、夕霧は、一条御息所（落葉宮の母）から柏木の笛を贈られる。その笛を吹いて床に就いた夕霧の夢に柏木の亡霊が出現する。コ すこし寝入りたまへる夢に、かの衛門督、ただありしさまの桂姿にて、かたはらにゐて、この笛をとりて見る。夢の中にも、亡き人のわづらはしうこの声をたづねて来たる、と思ふに、

「笛竹に吹きよる風のことならば末の世ながき音に伝へなむ思ふ方異にはべりき」と言ふを、問はんと思ふほどに、若君の寝おびれて泣きたまふ御声にさめたまひぬ。

〔横笛〕 三五九頁～三六〇頁

笛の音に導かれて、柏木の亡霊が出現したことが分かる。そして、「ただありしさまの桂姿にて」という記述から、柏木はまだ成仏できていないことも分かる。『源氏物語』では、死後もこの世に何らかの執着を持つ人物が亡霊となつて出現するように一貫して描かれている。

さらに、音楽においても、明石入道から明石御方への琵琶の伝授、朱雀院から女三宮への琴の伝授に見られるように、音楽は親から子へ受け継がれるものとして描かれている。柏木の亡霊も、我が子薫へこの笛を伝えたいという思いから出現したと考えられる。「末の世ながき音に伝へなむ」という言葉からも分かるように、柏木の我が子への執

着を読み取ることができるのである。

楽器の伝授Ⅱ親子の証、と考ええると、柏木の我が子への執着が頻りに描かれることと亡霊となって再登場することに、作者の人間の心を描く徹底した姿勢を窺うことができるのである。

これまでの物語の中で、夕霧の子供についての記述は見当たらないのであるが、柏木の亡霊が出現する前後には、「君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなどここかしこにうちして」（『横笛』三五八頁～三五九頁）、「この君いたく泣きたまひて」（『横笛』三六〇頁、と記述され、夕霧の子供が夜泣きをする様子が描かれているのである。

サ こなたにも、二の宮の、若君とひとつにまじりて遊びたまふをうつくしみておはしますなりけり。隅の間のほどに下ろしたてまつりたまふを二の宮見つけたまひて、「まろも大将に抱かれん」とのたまふを、三の宮「あが大将をや」とて控へたまへり。

（『横笛』三六三頁）

これは、夕霧が夢語りをするために光源氏のいる六条院を訪れた際の場面である。光源氏の幼い孫たちが遊ぶ様子が描かれている。この様子も、我が子を一目見ることなく亡くなった柏木との対比であろうと考えられる。

こうした描写によって、柏木の我が子への執着が一層強調されると考えるのである。

#### 四 柏木の笛——陽成院の御笛——

夕霧の夢語りを聞いた光源氏は次のように答えている。

シ 「その笛はここに見るべきゆゑある物なり。かれは陽成院の御笛なり。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひけるを、かの衛門督は、童よりいことなる音を吹き出でしに感じて、かの宮の萩の宴せられける日、贈物にとらせたまへるなり。女の心は深くもたどり知らず、しかものしたるなり」などのたまひて、末の世の伝へは、またいづ方にとかは思ひまがへん。さやうに思ふなりけんかし、など思して、この君もいといたり深き人なれば、思ひよることあらむかしと思す。（『横笛』三六七頁～三六八頁）

『源氏物語』では、柏木は父親の内大臣とともに和琴の名手として描かれており、ここで笛の名手として語られるのは異例である。そのため、作者は、柏木の遺愛の笛に関するエピソードが必要となり、陽成院や故式部卿宮といった具体的な人物の名前を挙げているものと考えられる。つまり、柏木の遺愛の楽器が、これまで名手として描かれてきた和琴ではなく、「笛」になっていることから考えると、作者にとって、笛にこだわる必要があったと言えるだろう。

和琴の名手として描かれている柏木であるが、物語の中で一箇所だけこの引用シを踏まえているのではないかと考えられる場面が見られる。それは、「篝火」巻で柏木が笛を吹いている場面である。

ス 「くはや」と出てたまふに、東の対の方に、おもしろき笛の音、  
箏に吹きあはせたり。「中将の、例の、あたり離れぬどち遊ぶにぞ  
あなる。頭中将にこそあなれ。いとわざとも吹きなる音かな」と  
て、立ちとまりたまふ。

〔篝火〕二五八頁  
この引用に記されている頭中将とは、柏木のことである。「いとわざとも吹きなる音かな」とあるように、光源氏が柏木の笛の音に感心している場面である。巻の執筆順序というのは分からないが、もし、配列の順序通り、「篝火」が先だとすると、作者は柏木に遺愛の楽器を笛にする構想が既にあり、伏線としてこの場面を記したと考えられるだろう。

さて、先に楽器の伝授は、親から子へと血筋に係すると述べたが、まずは、なぜ「和琴」ではなく「笛」でなければならないのかということを考えてはならないだろう。

笛については、既に山田孝雄氏が『源氏物語の音楽』<sup>注2</sup>で、「笛に至りては全く男子のわざにして女人これに関せることを記さず。普通には殿上人の技とせる」という指摘をしている。一条御息所から夕霧に笛が渡されたというのも、笛は男性の楽器であることが理由の一つであると考えれば、納得できる。つまり、男性も女性も演奏する和琴ではなく、作者にとっては、男性だけが演奏する「笛」でなくてはならなかった、ということになりはしないだろうか。

したがって、柏木の遺品として「笛」が登場した時点で、いずれ薫の手元に渡るといのが前提にあり、それは読者にも予め推測できて

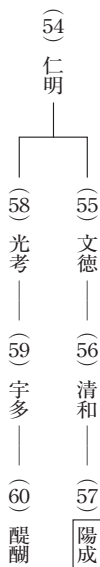
いることではなかったか。むしろ、それに対して光源氏がどのように答え、どのように切り抜けるかということが問題であったのである。ところで、光源氏の言葉の中に、「かれは陽成院の御笛なり。それを、故式部卿宮のいみじきものにしたまひける」とあるが、陽成院と故式部卿宮とは、物語の上でどのような関係なのであろうか。テキスト類を見てもその関係については触れていない。ただ、「陽成院」は史実上の陽成天皇とし、「故式部卿宮」については、朝顔斎院の父とする『河海抄』<sup>注3</sup>の説と紫上の父とする『花鳥余情』<sup>注4</sup>の両説があり、未だ特定されていない<sup>注5</sup>。

「故式部卿宮」については、『日本古典文学大系』、『日本古典文学全集』、『新潮日本古典集成』、『新日本古典文学大系』、『新編日本古典文学全集』、これらのテキストでは、陽成天皇の弟の貞保親王（式部卿宮で笛の名手）という実在の人物を思わせるという説明がされている。一方、玉上琢弥氏<sup>注6</sup>は、「紫上の父で故人になっていれば、その人の笛を源氏もつ理由は生ずる」とし、紫上の父として考える。しかし、その理由は玉上琢弥氏とは少々異なる。

そもそも、楽器の伝授は何らかの血縁関係がなくてはならない。仮にこの笛が紫上の父のものであったとしても、夫の光源氏が持つことは血縁関係がないのでおかしい。また、紫上自身が父親の遺愛の笛として持つということも当然考えられるが、笛という楽器は男性のものであるので、女性である紫上が持つ理由としては納得できないのが

ある。

「陽成院」という呼称は、『源氏物語』において、この「横笛」巻での一例のみなのである。作者が、でたために登場人物の名前を付けることは考えにくいことであろう。そして、『尊卑文脈』<sup>（注7）</sup>を見ると、陽成天皇の直系子は皇位にはついておらず、血筋は陽成天皇で断絶している。



『新日本古典文学大系』<sup>（注8）</sup>には、「物語は史実の人物を時折物語内に招請することがあっても、読者は史上と物語の内部とを混同しないはず」という注が付してある。この考えに基づく、作者は、物語は物語としての人物を想定しながら、まず、史上のイメージを物語に利用したのではないかと考えられる。

次に、血脈による楽器の伝授ということを考えてみたい。楽器の伝授は血脈によるとすると、陽成院は、故式部卿宮にとつて、関係の特定まではできないが、曾祖父、祖父、といった、何らかの直系の血縁関係にある人物なのではないかと考えられる。勿論、『源氏物語』の中では、「桐壺」・「賢木」・「若菜上」巻で「先帝」と呼ばれている式部卿宮の父も視野に入る。というのも、この先帝という呼び方は、い

ずれも地の文で語り手によるものである。登場人物が先帝を「先帝」と呼んでいる例は『源氏物語』には見られない。つまり、登場人物が先帝を院号で呼んでいる、という可能性が考えられる。『有職故実大辞典』<sup>（注9）</sup>によれば、「後一条天皇以後は在位中崩御した天皇にも、里内裏の殿名などによつて院号をおくるのを常例とし」ていたとあるので、後一条天皇以前には、常例ではなかったが在位中に崩御した天皇にも院号がおくられていた可能性も考えられる。また、『天和物語』<sup>（注10）</sup>を例にすると、先帝と呼ばれているのは、清和・宇多・醍醐天皇であり、先帝と呼ばれていても必ずしも一代前とは限らないのではないかと考えるからである。以上のような理由から、物語における陽成院は、式部卿宮の曾祖父、祖父、父といった直系の関係人物なのではないかと私は考えるのである。

袴田光康氏は、先帝の皇子である紫上の父よりも一院の皇子である朝顔齋院の父が先に式部卿宮に任官されたことに注目し、『源氏物語』における即位の順序は①先帝②一院③桐壺と指摘し、先帝は一院の父や兄弟などという近しい関係ではなく、皇統の優劣を主張しなければならぬような関係にあったとし<sup>（注11）</sup>、さらに、先帝の系譜について、次のように述べていることを押さえておきたい。

先帝と一院はそれぞれ異なる皇統に位置していたと見なければならぬ。新たに誕生した自流の皇統の権威を確立するために、その血統を優先させる論理によつて、先帝の第一皇子を越して、朝顔の父宮は、式部卿に任官したと考えられる。それは、桐壺帝即

位によって開かれた新たな一院の皇統の始発を物語るものであり、朝顔の背景を読者の仄めかす一つの方法でもあったのである。<sup>(注12)</sup>

この論を踏まえて、考えると、「陽成院の御笛」は、史実の上で皇統の断絶を表象する「陽成院」という名前の持つイメージと、袴田氏が指摘された「源氏物語」内で皇統の断絶を表象する「先帝」の血筋をひく「故式部卿宮」とのイメージとを融合したものであると言えるのではあるまいか。

女三宮の母親は、紫上の父である式部卿宮と兄妹という設定である。そうすると、式部卿宮にとって薫は姪の子ということになる。陽成院と故式部卿宮とに何らかの血縁関係を読み取ると、陽成院の直系にあたる人物が笛を持つことになるのである。したがって、「ここに見るべきゆゑ」と言った光源氏の理屈が成り立ち、笛が薫の手元に渡っても何らおかしくはないのではないか。

さらに、作者は、薫が笛を持つ理由を、表面上はオブラートに包むような形で光源氏に語らせながら、また一方では、人物を特定する必要はないのに、「故式部卿宮」という特定の名前を出すことによって、紫上の父は既に亡くなった人物であるということも示しているのではないだろうか。したがって、「故式部卿宮」は、紫上の父であると考えるのである。

つまり、「陽成院の御笛」とは、物語現在に続く桐壺院皇統のものであるが、桐壺院皇統とは別の断絶した皇統を象徴する「笛」であったと見るべきなのである。

## 五 笛の伝授の後

夕霧は、光源氏に夢語りをするために六条院を訪れるが、その際、柏木の遺言も伝える。柏木の夕霧への遺言の中に、「事のついでではべらば、御耳とどめて、よろしう明らめ申させたまへ」（「柏木」三二六頁）、「さるべきついでではべらむをりには、御用意加えたまへ」（「柏木」三二七頁）とあったが、柏木の亡霊出現が自らの遺言を伝える契機になつていえると言えるだろう。

また、柏木は、遺言の中で「この勘事ゆるされたらむなむ、御徳にはべるべき」（「柏木」三一六頁）と述べているが、決して自分だけのことを言っているのではないと思われる。口に出すことはできないが、柏木が光源氏に赦されることで、残された女三宮と薫についても赦して欲しいという懇願の遺言だったと考えられる。

次の引用セから夕の傍線部に見られるように、薫や女三宮を受け入れることができない光源氏の心が描写されている。

七 夜一夜悩み明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ。男君と聞きたまふに、「かく忍びたることの、あやにくにいちじるき顔つきにて、さし出でたまへらんこそ苦しかるべけれ、女こそ、何となく紛れ、あまたの人の見るものならねば安けれ、と思すに、また、かく心苦しき疑ひまじりたるにては、(略)

（「柏木」二九八頁）



ソ  
いと何心なう物語して笑ひたまへる、まみ、口つきのうつくしきも、心知らざらむ人はいかがあらむ、なほ、いとよく似通ひたりけり、と見たまふに、(略)めざましと思ふ心もひき返し、うち泣かれたまひぬ。

〔柏木〕三三四頁  
人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

「誰が世にか種はまきしと人間はばいかが岩根の松はこたへむあはれなり」など忍びて聞えたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。

〔柏木〕三三四頁―三三五頁  
このように、光源氏は女三宮や薫を受け入れることができないでいた。しかし、次の引用チ・ツの記述に見られるように、光源氏は薫の無邪気さを見て、少しづつ女三宮と薫を受け入れようとする心と、やはり許せないでいる心とが交錯するようになってきている。

チ  
宮にも似たてまつらず、今より気高くものものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似けながら見なされたまふ。

〔横笛〕三三九頁  
ツ  
月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさらたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし。(略)あまた集へたまへる中にも、この宮こそは、かたはなる思ひまじらず、人の御ありさまも思ふに飽かぬところなくてものしたまふべきを、

かく思はざりしさまにて見たてまつることに思すにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく、なほ口惜しかりける。

〔横笛〕三五一頁  
まさに、光源氏の心が揺れ動いているときに、柏木の亡霊が夕霧の夢に出現するのである。そして、夕霧から光源氏に、柏木の亡霊や遺愛の笛の話、柏木の遺言が伝えられた後は、光源氏の心に変化が見られるのである。

「横笛」巻の次巻である「鈴虫」巻においては、女三宮と光源氏が琴を弾く場面が描かれている。

テ  
琴の御琴召して、めづらしく弾きたまふ。宮の御数珠引き怠りたまひて、御琴になほ心入れたまへり。月さし出でていとほなやかなるほどあはれるに、空うちながめて、世の中さまざまにつけてはかなく移り変るありさまも思しつづけられて、例よりもあはれる音に掻き鳴らしたまふ。(「鈴虫」三八二頁―三八三頁)  
光源氏の女三宮と薫に対する態度は、これまでとは異なり、女三宮と琴を弾くまでに心の在り方が変化している。

ト  
「月見る宵の、いつともものあはれならぬをりはなき中に、今宵の新たなる月の色には、げになほわが世の外までこそよろづ思ひ流さるれ。故権大納言、何のをりをりにも、亡きにつけていと惚はるること多く、公私、もののをりふしのにほひ失せたる心地こそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ、言ふかひある方のいとうるさかりしものを」などのたまひ出でて、みづからも、



掻き合わせたまふ御琴の音にも袖濡らしたまひつ。

〔鈴虫〕三八三頁―三八四頁

また、この記述は、光源氏が、御簾の中にいる女三宮に聞こえるように、管弦の遊びに訪れた人々に柏木のことを話している場面である。光源氏の心は、柏木の死を悼むように変化している。

作者にとって、柏木と女三宮の密通事件は、女三宮の出家、柏木の死だけを描いたのでは、事件の終結にはならなかったのである。薫を受け入れる光源氏と光源氏の子として成長する薫を描いてこそ、女三宮事件の終結を図ったと言えるのではないだろうか。

この笛の伝授について、高橋和夫氏は次のように述べる。

死後自己の魂<sub>二</sub>横笛をその子供に伝える、その子はこの親からの魂を得て、めでたく功名をなすとげる、これが女三宮物語の骨子ではないだろうか。

この筋書から私たちは何を問題とすべきだろうか。それは親と子の問題である。思う人が得られない結果、かりそめの関係が生ずるのは光源氏の場合と同じだが、柏木の場合には、父親の栄華の契機としての子というよりも、断絶したはずの子孫が存在するのだという、むしろ“家”の問題だと言えよう。〔注13〕

確かに、高橋和夫氏が述べるように、柏木から薫へと真の親子としての音楽の相伝を意味することは理解できる。しかし、そのことがその後の物語展開とどのように関わっているのだろうか。その上、この笛の伝授が「家」の問題で、「断絶したはずの子孫が存在する」というこ

とを示しているのだとしても、薫が不義の子であるという事実が世間に明かされないかぎり、物語としての進展は何もないということになるのではないだろうか。結局、物語においてその事実が世間に明かされることはないのである。「幼心地にはの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおほつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし」(匂兵部卿一二三頁)という記述にあるように、むしろ、その秘密が明らかにされないことで、薫自身の内面に影響を与え、そのことが宇治十帖の物語展開にも影響しているということができるのである。〔注14〕

また、小嶋菜温子氏は、次のように述べている。

王権にまつわる主題性を柏木の血の相伝の物語がひきずることはまちがいない。結果的には光源氏への報復のようにみえながら、その実それは光源氏になった王権の主題を、明石一族とは別に、そして制度的な限定を受けつつも、ひきつぐものであったのだ。〔注15〕

これまで述べてきたように、むしろその反対なのではないだろうか。薫は不義の子、柏木の子ではあるけれども、表向きは光源氏の子として成長している。王権とは関わりがないのである。

浅尾広良氏〔注16〕は、「皇権から自立して相承してゆく家の論理を読み取って然るべきであろう」と述べている。しかし、家の論理以前に、作者は、女三宮事件の終結を図り、その一方で、光源氏の子としての薫について、陽成院の名前を利用しながら、薫は皇統に回帰することはありません、ということを示唆しているのではあるまいか。

繰り返すが、皇統に關係する笛が、故式部卿宮から臣下である柏木の手に渡ったことは、この「陽成院」の名前の持つイメージを利用しながら、薫は、皇統に回帰しえないことを作者が示唆しているのではないかと私は考えるのである。

その後の『源氏物語』においても、薫が皇統に回帰することはないのである。

## 六 おわりに

「陽成院の御笛」。それは、あくまでも「ただ人」光源氏の子とする薫の位置付け、方向付けを示唆するものとして物語に描かれたものであると言える。

そして、柏木の亡霊が夕霧の夢に出現したことで、夕霧を通して柏木の思いが光源氏へ伝わり、光源氏が柏木のその思いを女三宮と薫に對して受け継いでいく。「陽成院の御笛」には、単なる楽器の伝授というだけではなく、「心」の伝授を描いたものであったと読み取ることができるのである。

注1 本文の引用は『新編日本古典文学全集』『源氏物語』①～⑥、(小学館、平成六年三月～平成一〇年四月)による。

2 山田孝雄『源氏物語の音楽』(宝文館出版、昭和九年七月)

3 『河海抄』(室松右雄校訂、國學院大学出版部、明治四一年六月)

月)

4 源氏物語古注集成『花鳥余情』(桜楓社、昭和五三年四月)

5 高橋和夫「女三の宮物語と横笛の伝授について」(『源氏物語の主題と構想』、桜楓社、昭和四一年二月)、小嶋菜温子「柏木の笛

―幻の血脈へ―」(『源氏物語批評』、有精堂、平成七年七月)、浅尾

広良「柏木遺愛の笛とその相承」(『源氏物語の視界4』、新典社、平成九年五月)、柳井滋「陽成院の御笛―横笛」と「宿木」の間

―」(『成蹊国文』三六、平成二五年三月)、森野正弘「柏木の横笛にまつわる逸話の諸相」(『源氏物語の新研究』内なる歴史性を考える)、坂本共展・久下裕利編、新典社、平成一七年九月)、等参照。

6 玉上琢弥『源氏物語評釈』第八卷(角川書店、昭和四二年三月)

7 新訂増補『国史大系』「尊卑分脈」第六十卷上・下(吉川弘文館、昭和三七年六月～昭和三七年八月)

8 『新日本古典文学大系』「源氏物語」四(岩波書店、平成八年三月)

9 『有職故実大辞典』(吉川弘文館、平成八年五月)

10 『新編日本古典文学全集』「竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語」(小学館、平成六年一二月)

11 袴田光康「『源氏物語』における式部卿任官の論理―先帝と一院の皇統に関する一視点―」(『国語と国文学』九二二、平成二二年九月)

12 注11に同じ。

13 注5、高橋論文。

14 拙稿「『源氏物語』続編における八宮の遺言の一視点―遺言を乗り越えた女性たち―」（『清心語文』九、平成一九年七月）、において触れている。

15 注5、小嶋論文。

16 注5、浅尾論文。

（やまはた さちこ／二〇〇六年度ノートルダム清心女子大学  
大学院博士後期課程単位取得満期退学）